

月夜の子守唄

光野 朝風

月夜の子守唄

それはそれは大昔の話。まだ星たちが喧嘩したり、かけっこしたりして、忙しそうに動き回っていた時代。月の国に多くの星たちとともに住んでいた天女がいました。

天女は星たちを導き、月を導く役目をおっていました。星々は月のそばで競い合うように美しく輝いていました。天女は朝の訪れとともに星たちを寝かせ、夜の訪れとともに星たちを起し夜空へと送り出し、輝かせます。

天女は朝と夜の力を与え、また、月から星々へと力を与えていたのです。

天女は毎日欠かさず月に向かって月の力が失われないように祈り、時には星たちとともに遊び、やがて眠りにつきます。

月は天女の祈りで自ら光り輝き、そして夜には休み、星々を包み込んでいました。天女もまた、月の光による不思議な力の加護を受けて生きていました。

そんな天女がある日、恋に落ちました。それは太陽の国の王子様でした。天女が星たちと遊んでいるとき、遠くを横切る、燃える流星のようなりりしい姿に一目惚れしてしまったのです。

しかし天女にとってそれは叶わぬ恋でした。なぜなら太陽の光は月の国に住むものたちにとって、あまりにも強すぎて、みんな焼かれてしまいます。

太陽の国の人たちは大変好戦的で、次々と光の強さと同じように領土を広げていきます。

今まで焼かれずに平気だったのは、天女が毎日祈っているために月の力が強く、太陽の人たちを寄せ付けなかったからです。

天女は王子様の姿を心の奥に思い浮かべるたびに胸が苦しくなって、不安にも似た気持ちになりました。瞳を閉じても、まるで焼きついたかのように王子様の姿が浮かんできて、胸が締め付けられました。天女は、どうして自分は月の国に生まれ、王子様のもとへ行けないのだろうと思うと、とても切なくなり涙が自然と流れてきました。

天女はかなわぬ恋に毎夜涙にくれました。天女は毎日王子様を想い、毎日悲しみ、祈ることさえもできなくなっていました。

天女が祈らなくなったことで月の光はやがて赤く変わり、その透明さをなくしていきました。

王子様への想いがつゆのり、いてもたってもいられなくなった天女はついに、太陽の国へ行き、王子様に会うと決意しました。それは自分の死をも決意したものでした。

天女が月の加護を離れ太陽の国へ行くと、一瞬にしてその体が燃やされてしまいます。それでも天女は王子様に気持ちを伝えたかったのです。伝えられなくても、近くで王子様の姿を見たい。そう思っていたのです。

その時、太陽の国では赤い月に攻め入る準備をしていました。太陽の国の大王は日に日に弱っていく月の力の前に、太陽の軍が攻め込めるのは今しかないと思っていました。太陽の国の大王は最愛の息子への贈り物として、月を太陽と同じように赤く燃え盛る国へと変えることを王子様へ約束していました。

王子様はついに月の国へと攻め入っていきました。天女はいち早く異変に気がつき、どうか星たちだけでも助かるようにと思い、星たちを逃がそうと努めました。

しかし星たちは混乱し、バラバラと動くだけで天女の必死な思いも叶いません。

天女は自分のせいでこうなったのだとひどく後悔しましたが、もう手遅れでした。

月は炎に包まれ、混乱した星たちは死んでしまったり、暗い夜空の先へと飛び散ったりしました。

天女は最後まで月の国を守ろうと、最後の力を振り絞り、月へと祈りました。天女の祈りの前に太陽の軍は少しずつ弱っていきました。

そこへついに王子様が月へと乗り込んでいきました。王子様は月へと祈りを捧げる天女の姿を一目見て、そのあまり

の美しさに心を奪われて、攻めることさえも忘れました。

天女は王子様の姿を見て、悲しそうに目を細め、見つめました。祈ることを止めた天女の体は炎に焼かれ、青白い光になって闇の底へと落ちていきました。

そのとき王子様は天女の涙を見ました。王子様とこんな形で別れなければならない悲しみ、ずっと思い焦がれていたこと、ようやく会えた喜び。涙は、王子様に天女のすべての想いを伝えて、炎の中で消えていきました。

ついに太陽の国の軍に焼き尽くされ、灰のようになり、天女の祈りを失った月は自ら輝くことができなくなってしまいました。

王子様はそっと月の国から引き上げ、太陽の国の大王にすべてを伝えました。

そして王子様は大王の許しを得、太陽の国からずっと月を照らし続けることにしました。

王子様は自らの光で月を照らし続け、誰一人として月へ入ることを許しませんでした。

天女は王子様と別れるとき、その身が減んでも王子様を永遠に愛し続ける証として目印を残しました。

それは月に残していった、白い愛の紋章でした。

王子様もまた、月を照らし続けることによって天女への永遠の愛を誓ったのです。

その紋章が今でも地球と呼ばれる、この星から見えるそうです。

二人の愛の証として。